

こころの夜を奏でてきみと

作——浅井キヤビア

(一)

「ガラクタでできた天国みたい」  
灰洲ハイシュのノミの市を見ながら、となりの楓緒カエネがつぶやいた。

大型トラックの荷台にテントを張ったおそまつな露店のなかで、あたしと楓緒とぶさいくなブチ猫いっぴきと、こわれたオルガンとフィルムでできた色とりどりの造花がのこっていた。子供も物資も、ほかは全部売れた。楓緒は鍵盤盤のうえにこしかけて足をぶらぶらゆらし、あたしはそれを眺めてる。

「二人きりになっちゃったね」

あたしはそう言った。楓緒はへんじをしらない。

「なんで黙るかなあ。あたしのこと嫌い？」

「そっちこそなんで絡んでくるの」

「なんとなく」

「さびしいなら猫と遊んでれば？」

そう言われたのでブチ猫においておいとすると、なあ、と小さく鳴いてあたしのひざの上に乗った。なあおう。うわあ人なつっこい。楓緒のほうがつつと猫っぽい。

がたととタイヤが鳴る。

カメよりゆっくりトラックが動きだす。

楓緒はおもちゃみたいなお仕着せのドレスが誰よりよく似あう、おもちゃみたいな女の子だ。泥くさい子どもだらけのひと買い宿で、紅茶いろの髪とミルクいろの肌は目立ったし、おなじくらい愛想の悪さも有名だった。はじめて会ったのがいつかは分からない。宿の

はぐれものだったあたしと楓緒は、いつも気がつくと隣にいた。

まあ、眠いとか寒いとか、そんな話しかしなかったけど。

楓緒がすわりこんだまま何ももしないから、前にプロマイドで見た外国のアイドルみたいなポーズをとって、道ゆく人たちにアピール。あたしたち売れのこりです、いまならお安く買えますよ。

ばかじゃないの、と楓緒がつぶやく。

「売れのこったなんてアピールしても誰も買わないわよ」

「なんで？」

「選ばれなかったものにはイヤな匂いがつくの。だから次の時にもやつぱり選ばれなくて匂いは強くなつていく。その繰り返いで、捨て子たちはどこまでも流れていくんだわ」

「その話すごいわかるわ」

「宿の知り合いにそういう子供でもいた？」

「ううん。あたしがそうだから」

楓緒がだまつた。

「前はたしか泡斯バウカスの関所の西の市で、その前は思いだせない」

「……いつも売れのこつちやうの？」

「買ってもらえるけど、すぐに捨てられちゃうんだなあ」

まあも、そのまあも、ずうつとそうだった。

たぶん楓緒の話は正しいんだと思う。あたしはもう捨てられ子の匂いでいっぱいなのかも知れない。それこそ自分じゃあもう匂い付けないくらいに。

「香水つきたいな」とあたしは言った。

「……もう全部売れちゃったよ」

「じゃあ洗濯機のなかに入つてぐるぐるしたい」

「水びたしになつちやう」

「それでもいい」